

手記

シベリアあの時あのこと

北海道 倉部 房次郎

抑留への序章

終戦（黄道河子でのこと）

誰もが、ひそかに待ち望んだ終戦であったが、私達には、それはまた「新たな苦難」への序章でもあった。先ずあの年の八月十八日、旧満州の黄道河子でソ連軍に降伏したその日の夜、私の所属中隊のS中尉以下十二名がそろって姿を消した。彼らは、とっさに「シベリア送り」を予感し、集団で離隊したのであろう。彼らもその後大変難儀したらしく、その様子やそしてS

中尉が「銃殺」という悲運の最後だったことを、後年になって知ることができた。

十九日に武装解除されたが、ソ連兵はしきりと「トウキョウダモイ」を口にする。そんな中で「これで日本に帰れる」とはしゃぐ者や、「いや、シベリア送りだ」と悲観する者などさまざまであった。私は、妙に心に引っ掛かるものを感じていた。それは、あの年の六月、中隊の駐屯地だった樺林（牡丹江市北方）で、E見習士官（神官学校出）が私に語った言葉のせいである。彼は「この戦争は負ける、ソ連も参戦するし、関東軍はシベリアに連行される。今のうちにロシア語を覚えておいた方が身のため」と言った。軍隊内で、しかも将校が「随分と物騒なことを言う」と内心びっくりしたが、現実には彼の予想どおりになってしまった

のだが。

拉古收容所

ソ連軍の捕虜となった我々は、すぐに「拉古（牡丹江西方）」の軍馬廠あとに收容されたが、その数は数千人ほどのものだったと思う。食糧も窮乏し、一々二頭残っていた馬もまたたく間に馬肉にされたようだった。周辺の農作物はとりつくされ、二日目には馬鈴薯一個も残っていないありさま。それでも我々には最小限の食糧は支給されたが、惨めだったのは流浪していた在留邦人、收容所への食料運搬車の荷台にこぼれた米粒に群がる情景を、所内から何度も目にした。可哀相だったがどうしようもなかった。あの方たちの中に、その後の悲劇的な運命を辿った人もいたのではないだろうか。「トウキョウダモイ」のソ連側の声とともに、いよいよシベリアに向けて出発することになったが、このとき千人単位に大隊が編成された。（実はこれがシベリアでの作業班だった）私は、北海道出身者の中隊（最初の所属隊）に組み替えられたが、收容所を発ったのは九月八日である。

ダモイ・シベリア行

野宿を重ねながらシベリアへの道を歩んだ、数千人の集団だったと思う。ソ連兵の口にする「トウキョウダモイ」、誰もが何度も耳にし、望郷の念をかきたてられた言葉である。それを信じていた人も少なくなかったと思う。「そうであってほしい」と願いつつも、私には、どうもそれとは違う運命が待ち受けているような気がしてならず、歩む足どりは重かった。樺林でのE見習士官の言葉も頭にあったし、それにソ連兵の「トウキョウダモイ」発言の多いのも、逆に不審に思えたからでもある。（つまりは、逃亡防止策にすぎなかったわけ）結果は最悪となってしまったが、私は「どんな事態になっても、とにかく運命に従う」と心に決めていたから、それほどがっかりはしなかった。

抑留中の幾多の悲劇はすでにこの行軍中に始まっていた。その一つは、休憩時に用便のため集団を離れた一人が、「逃亡」と勘違いしたソ連兵に射殺されるという事件であり、さらに二三日後、「腸閉塞」で苦悶している者を集団から置き去りにするという、むごい

仕打ちも見せつけられた。「この身はやはり捕虜」そんな思いが日ごとに積もっていった。路々で、赤旗を手にした満州人の輕蔑の眼差しに、立場が逆転した者の悲哀を思い知らされ、やるせない気持ちも味わった。

微笑ましい思い出もある。夜おそくに野宿場所につき、グループで炊事をし翌朝の「にぎり飯」も作ったが、朝包みを開けてびっくり、「にぎり飯」が海苔巻のように黒いのである。怪訝そうな仲間の顔、だが、すぐに事情がわかって大笑いをした。つまり暗闇のなかで泥水で炊飯していたのである。何があろうと貴重な食糧、黒い食事をしてまた歩き続けた。

国境の街「綏芬河」を通過したのは、「拉古收容所」を出て七日目の九月十五日であった。シベリアの国境の街は「グロデコウ」。そこで大隊ごとに別れ、初めて汽車に乗って運ばれた先は大草原、「ここで草刈りをしながら帰還船を待つ」、ソ連側のこの言葉を信じるものはもう一人もいなかった。

捕虜三年二か月

空腹をかかえ、寒さにふるえ、そして劣悪な居住環

境のもとで、重労働に明け暮れる生活が三年二か月も続いた。「なんとかしても生き抜かなければ」の一念だけで耐えた日々である。收容所も十か所くらいは変わっただろうか。入ソ時は草原、雪の来る前に密林地帯に移ったが、その後はほとんど「ウオロシロフ市」周辺だった。いつしか入ソ時の中隊仲間とも離ればなれになり、帰国時には身辺には一人もいなくなっていた。收容所を変わることに新しい仲間もでき、体験を語り合いながら励ましあったが、今日なおその方々と文通を続けている。夕暮れどきの疲れた身体で收容所に帰る途中、民家の側を通ることがある。窓に映る電灯の光を見ながら「あの下に家族の団樂がある」と思うと、そぞろ虜囚の身が悲しく、望郷の念を募らせたのも何度のことだったろう。

抑留中はさまざまな作業をさせられた。「草刈り、森林伐採と製材、貨車仕事、大工のまね、建築土木、煉瓦づくり、倉庫荷役」などさまざまである。その過程では彼我の対立や営倉入りも体験したし、食糧を得るための危険な行為もし、病気で死線をさまよったこ

ともある。同胞の死にも何度か出合った。また、苦し
かった生活の中で、わずかに心温まる思い出もなかつ
たわけではない。いろいろと回想は尽きない。いまま
脳裏に強く残っている事柄を少し書き述べたい。

悩まされた「シラミと南京虫」

シベリアに入ってからまず悩まされたのが「シラミと南
京虫」かゆみと痛みで、疲れた体も熟睡することがで
きない。「シラミ」は満州当時からのもだが、肌着の
縫い目一杯に付着し、生地の色も見えないくらい。
「やせ細った我が身の血を吸い取って、丸々と太った
憎いやつ」、爪で「ブツン」と音をさせてつぶすのが、
なんとも言えない快感でもあったが、つぶしてもつぶ
しても繁殖力が旺盛でどうにもならない。「南京虫」
は壁の隙間隙間に巣くって、じわじわと身辺にし
のびよってくるから手に負えない。枕元の雑糞の中は
「南京虫」でいっぱい、最初に開けてみたときは赤い
布地に見紛うようだった。余りの不気味さに、身体中
に「ざわめき」が走ったのを覚えている。「シラミ、南
京虫」の執拗な攻撃に、「こいつらに殺される」ので

は、とさえ思った。所内に熱気室をつくり、衣類、持
ち物を放り込んで害虫を消滅させたり、薬煙を壁に吹
き込んで「南京虫」を退治したりしたが、二年目ころ
からは被害もかなり少なかった。

作業、そしてA曹長のこと

「ノルマ」身ぶるいするような言葉だ。このために、
同胞がどれほど苦しんだことか、私も、伐採、煉瓦工
場などで「ノルマ」達成のため、夜八時ころまで働か
されたことが何度もある。ある日、発熱で作業を休み、
ベット上段で就寝していたら（N軍医の承諾を得て）、
ソ連衛兵司令（性悪で毛嫌いされていた）がN軍医を
同行して舍内巡回にきた。「重い病気か」と軍医に問
い、N軍医の答え終わらないうちに、わめきだし、私
はベットから引きづられて床に殴り倒されてしまった。
口の中が切れ、血を出しながら作業場に追い出された
こともある。

「ウオロシロフ」のビル建築工事でのことであるが、
ある日、ソ連側は「工事はノルマどうりに進捗してな
い」との言い分で、時間がかなり経過しても作業を終

了させようとしな。日本側の指揮者であるA曹長が強硬に抗議するが頑として応じない。仲間の不満の声も高まる、遂にA氏は独断で作業中止を指示し、仲間を引上げさせてしまった。彼らの間に不穏な感情がただよい、やがてA氏はソ連衛兵所に呼びつけられた。

仲間全員が収容所広間に集合し、固唾をのんで成り行きを見守っていたが、衛兵所内での「司令とA氏」との激しい口論の様子が伝わってくる。その挙げ句、衛兵に殴られ所外に投げ飛ばされたA氏の姿が見えた。激昂した数人の仲間が走り出そうとしたが、歩哨は銃口を向けるし、皆で懸命に仲間を引き止めて事なきを得たものの、まかり間違えば大変な事態に発展したかもしれない。それからまもなく、A氏はどこかの収容所に移動させられたが、その後の消息はわからない。A氏は香川県の出身だった。

営倉に入れられる

同じ作業場での私のことであるが、私の作業班の者が大失敗をやらかした。土台基礎工事のコンクリート打ちで、大きな丸太をセメントと一緒に埋め込んでし

まったのである。重要な基礎工事、大きな欠陥になるのはわかり切ったことだが、私はそれを見ていて、なぜか、やめさせようという気が起きなかった。運悪く、ソ連側の検査で不良工法が発覚して工事はやり直し、私は責任をとらされて営倉入りとなった。営倉と称しても大地に八立方メートルほどの穴を掘り、天井にテント生地をかぶせただけの代物、しかも、そこには雨水が溜まっていて座することもできない。木片で壁に段をつくって腰を掛けてみるが、眠りかけては滑り落ちるありさま。そこに、一昼夜閉じ込められたのだが、弱った体でよく耐えられたと思う。ただ、少しでもいい思いをした。深夜になると炊事場には誰もいなくなる、歩哨のスキをみて穴を這い出し、炊事釜の朝食用煮豆を失敬するわけ、仲間には申しわけない話だが、今だから告白できることである。

食糧確保のための冒険

どこの収容所でも話題は「ダモイ」と「食べ物」のことばかり、「食べ物」の一粒ひとかけらでも、その分だけ命を長らえられる「そんな思いで大切にした。馬

糞が饅頭に見えたり、食事をしてゐる夢が覚めたら毛布の端をかじっていたこともある。食糧を扱う作業は皆に歓迎された。少しはくすねることができたからで、私も何度か体験したが、いつも成功するとは限らない。あるとき米を小袋に入れ、肌着の裏に隠して持ち帰ったが、収容所入口の検査で見えられ、強烈な鉄拳を二、三発くらったことがある。一瞬目がくらみ、鼻血をふきだして惨々の体たらくだった。

時をへるとともにソ連側の監視も緩やかになり、ときには、作業場への往復を我々が単独で行動したりするようになった。その心理状態をうまく利用したことがある。夜、四、五人が一組になり、監視兵のスキを見て収容所を脱柵し、隊伍を整えて行進する（これだと誰の目にも作業帰りと思わせられるから）。目的地は「とうもろこし畑」。「とうもろこし」を手折るときの「ポッキン」という音に神経を使いながら、一人が十本くらいを失敬し、班に持ち帰って皆で夜食を楽しむのであるが、余分のものは縁の下に隠しておいた。私は二回参加したが思えば危険な行爲だった。歳月を

へた今日、それも“痛快”な思い出になっている。
急病で九死に一生

二年目の冬の明け方、激しい腹痛で目が覚めた。「急性虫垂炎」と診断されたが、元軍医がいても手術はおろか、これという薬もない。「これで我が身もシベリアの土か」と半ば観念した。仲間は作業に出て舎内には誰もいない。激痛に耐え、独りで舎外の氷雪を取り込んで、とにかく患部を冷し続けた。その日の作業が終わっての夕方、ようやくソ連兵に、遠方の「日本医務室」に連行されたが、その道程がまた乱暴きわまりないものであった。「トラック、汽車、トラック」と乗り継いで、着いたのが夜中の十一時、その間ずっと苦しみ通しだった。軍医に何かの注射をされ、いつしか眠ってしまったが、朝方目が覚めるとあの痛みがきれいに消えていた。「助かった」と誰にとはなしに手を合わせていたのを覚えてゐる。軍医は奇跡的だと言う、まさにそのとおりだったが、私は、亡くなった父や兄が、見守ってくれたような気がしてならなかった。季節が冬でもあり手近に氷雪のあったのも

幸いだと思う。あれがもし「暑い時期だったら」と思うと、今でも背筋に冷たいものを感じる。

なお、私が医務室に運ばれたあとで、仲間の亘伍長が「倉部君も助からないだろう、可哀相に」と話していたそうだったが、その亘伍長がそれからまもなく「急性肺炎」で、あつてなくこの世を去ってしまった。あの環境のもとでは、「明日の運命は誰もがわからない」としみじみと思ったものである。なお、勤務後さらに五時間も費やして、私を「医務室」に連行してくれ、なにかと勞つてくれたソ連兵（日頃から互いに顔見知りだった）には、立場を越えて素直に感謝したいと思う。

同胞の死

同胞の死に何度か出合ったが、一年目の冬、起床時に起きない人がいた。夜中に、誰も知らないうちに息を引き取ったのである。最初の犠牲者であった。そのときは、僧職だった人の説教で皆でねんごろに弔ったが、その後も、病气やけが、また逃亡者と見なされての射殺など、次々と死亡者が出た。だが、だんだんと

弔いする心身のゆとりもなくなり、手すきの誰かが、遺体を埋めてくるだけになってしまった。埋葬されている場所もわからなくなっていると思う。

私が、自分の手で葬った遺体が二体ある。「日本医務室」に入室して、徐々に健康も回復してきたころ、同室の仲間が一日おいて二人亡くなった。どちらも夜中に誰にも看取られることなく、ひっそりと息を引き取っていたのである。弔い事はなにもなく、命じられるままに、同室の相方とで遺体を担架にのせ埋めに行った。凍りついた大地、寒風の中で、しかも病中の身では五十センチ掘るのがやっとだった。遺体が隠れる程度の埋葬をし、二人で合掌して埋葬はおわった。二体とも近くに並べたが、思えば「惨めな埋葬」であった。あの頃は、シベリアの凍土のように人々の感情も凍ってしまい、人の遺体も「一つの物」としか見ていなかったと思う。今はただ、故人の成仏を祈るのみである。

「仲間の自殺」という衝撃の事態にも出合った。「医務室」を出て近くの収容所に配置されたときのこと

ある。そこでは「民主化運動」が燃え上がっていた。

「運動の強制」と「ノルマ」にはとほと疲れてしまったが、それに耐え切れなかったのか、若い仲間が逃亡するという事件が起きた。手分けして捜しても見つからず、翌朝になって、近くの作業場で縊首の姿で発見された。「広いシベリアでは逃げきれない」と観念して収容所近くまで戻ったものの、懲罰を恐れて中に入れなかったのか、追いつめられた気持ちのまま、自ら死の道を選んだのであろう。彼の心情を察すると切なく、虜囚の身の悲哀をいまさらのように感じたものである。それでもあの時は、形ばかりではあったが、皆で葬礼を行い「黒人霊歌」を斉唱して野辺送りをしたのが、せめてもの慰めだった。

民主化運動

時とともに思想教育が次第に高まっていた。「日本新聞」が配布され始めたのは二年目に入ったころだったろうか。「広宣紙」だから内容は推して知るべしだったが、活字に飢えていたから結構よく目を通した。「自殺事件」のあった収容所は、私の最終の所だった。

だが「思想教育」や「民主化運動」はかなり活発であった。もっとも大半は「ダモイ」を意識して「そのふり」をしているだけだったが。政治部将校も来ていたし「民主委員会」などもつくられていた。討論会はしょっちゅうである。「大衆討議」にかけられて委員長を降ろされ、ただの人になって消沈した姿や、地方での暴力組員が縮みあがっていたこと、また、元中隊長クラスが土下座させられた光景、などが今も目に浮かぶ。「大衆討議」と、もっともらしい呼称をしているが、その実は「独裁者の理屈だけが正当化される」不思議な機構であり、それにかけられると、どんな肝っ玉の人間でも震え上がってしまう、魔物のような存在であった。

「満蒙開拓青少年義勇軍」出身のY君が、民主委員長に祭り上げられ、情熱を傾けていた姿が思い出される。実は、私も終戦時まで、中隊内にいた「広島県出身の青少年義勇軍」の内務班長をしていた関係で、そのころの少年たちの顔がY君に重なり、Y君になんとか親しみを覚え「おだてられて苦勞の役目を受ける

こともないのに」と同情しながら、その行動が批判されないように願っていたように思う。ともあれ、あのころ、いっぱしの運動家気取りで所内を闊歩していた連中は、今どうしているだろう、あれはまさしく虚構の運動だった。

私は「思想的な偏りはしまい」と堅く心に誓っていたから、そうした行動は一切しなかったが、ただ、「この生活体験の中から将来的な何かが得られるのでは」とした考えは持っていた。だから、冷静に所内の動きを見てきたつもりでいる。こんな経験もある。作業現場での昼の休憩時に、少年のような紅顔の監視兵に、「社会主義」について質問したが、彼は「理想社会とそれまでの過程など」について、情熱的に話していた表情も忘れがたい。彼は「党員候補者」だといって誇らしげに証明書を見せていたが、今、ソ連の体制改革でどんな運命下にいるだろう。

いろいろなこと

家族との交信

二十二年の後半だったと思うが、初めて日本への通

信が許された。早速、故郷（函館）にたより（ハガキ）をしたが、もちろん抑留生活のことなんか書けない。ただ生きていることだけを知らせればそれで良かった。半年くらい経って母から、弟の字で「みな元気でいる」との返事が届いたが、沖繩にいたはずの兄のことには一言もふれてなかった。だが、私は既に兄の戦死を悟っていた。それというのは、その一年ほど前に兄の夢を見ていたからで、軍服姿だったが、私がいくら話しかけても無言のまま、そのときに「沖繩で戦死したな」と直感していたのである。

大工の棟梁と間違えられる

仲間に腕の良い大工の棟梁がいた。顔が私に似ていたので、ソ連の主任が私をその棟梁と間違えてしまい、「倉部建築組」をつくらされてしまった。その棟梁は「気にすることはない、要領よくやっていこう」と笑いながら、私を名目の頭にして、実技は彼が担当する方法でしばらく大工仕事をしたこともある。土方作業よりもきれいだし、やりやすかったが、あるとき難題に直面してしまった。給水塔工事を担当していた別の

組の責任者が、高所から落ちて大怪我をし、その代役が私の組に回ってきたのである。作業現場は高所で狭く、極めて危険なところである。さすがの棟梁も逃げ腰、「なんとか回避してくれ」と言うし、私だって引き受けたくない。あれこれと理由をこしらえてソ連の主任と交渉、やっと代役から逃れることができた。

「手仕事の不器用な私が大工の棟梁」人生にはいろいろなこともあるものだ、と時々は当時を思い出して、苦笑したりしている。

時計と黒パンの交換

ソ連兵と、時計と黒パンの交換をしたことがある。私の時計は故障ではなかったが、油が切れていて停止ぎみであった。それを隠して交換に成功した。二三日後に彼から文句を言われたが、「捕虜の時計師に見せればすぐ動くようになる」と教えてやったが、後味のいいものではない。当時、監視所に仲間の時計師が詰めていたから、きつと修理してもらったと思うが。

帰国していた脱走者

脱走した二人の仲間がいた。広いシベリアでしかも

土地不案内、とても成功するとは思えなかったが、帰国してから、名簿で、彼らが先に帰還していたのを知って驚いた。どんな手段をとったのか、また経過を辿ったのか、たいそう興味を持ったし、ぜひ、聞いてみたかったが、ついに機会をつくれないうしだった。彼らが今なお健在なのかも知らない。

「雨のブルース」を聞く

「雨よ降れふれ悩みを流すまで」淡谷のり子さんの、この「雨のブルース」を聞いたことがある。ウオロシロフ市の建築現場でのことであるが、昼休みに疲れ切った体で寝ころんでいると、ふと、場違いのようにこの歌が聞こえてきた。「あれっ、雨のブルースだ」仲間の声につられ、体を起こして辺りを見回したところ、近くの民家の窓が開けられ、そこからレコードの音が流れていたのである。

窓越しに女性の姿が見えたが、顔はわからない。まさかここで、この歌を。皆もそんな思いの表情で耳を傾けていたが、それからの数日は必ずこの歌が流れてきた。一層望郷の念を募らせながらも、すさみがちな

心が、ひととき和らぐ思いがした。「あの奥さんは日本の人だ」、そんな噂が出始めたが、そうだったかもしれない。難儀している抑留者に、せめてもの情けをかけてくれたのであろう。苦しかった抑留生活の中の、わずかに心あたたまる思い出である。

仲間のたいした奴

人はいろいろな欲望を持っているが、抑留中のたいの仲間、食欲だけが唯一のもので、性欲なんか覚えな思っていたが、中には例外の人物もいたのである。俳優の某に容貌が似た人だったが、倉庫作業でソ連女性と口をきくようになり、ある日の休憩時に、その女性と連れ立って、積み荷の陰に姿を隠した。「交渉条件は腕時計だ」とあとで笑いながら話していたが、なんとも見事な行動に感心するしかなかった。もっとも、毎日が労働と抑圧された生活の単調な繰り返し。そんな中で、彼の行為は、少しは皆の気分転換になったかもしれない。

手づくりの娯楽

どこの収容所でもそうだったが、ささやかな娯楽を

工夫して気分を紛らわしたものである。仲間には器用な人もいて、白樺の木でマーシャン牌をつくり、好きな者が寄って楽しんだこともある。演芸会をよく催された。「流行歌、浪花節、手品、即興など」盛り沢山、中には友人はだしの芸達者もいた。強く印象に残っているものに「ハバロスク小唄」のことがある。収容所を転々としての何か所目だったが、別棟での演芸会を数人の仲間と聴きにいった九州出身のM君が「ああ、切ない、帰りたい」と言いながら帰ってきた。「ハバロスク小唄を初めて聴いたが、我が身が悲しくて涙が出てきた。抑留者の作詩、作曲だと言っていたが」と感きわまった表情で話していた。確かに、あの詞、曲は、よく虜囚の身の切ない気持ちを歌いあげていると思う。

帰国

各地の収容所で、徐々に帰国が始まっていることは知っていたが、我々の収容所の帰国第一陣は二十三年十月であった。帰国者選定の身体検査が行われ、数日前から下痢で体調を崩し、あばら骨が見えるくらいだった私もその選に入った。仲間の羨望の目をあとに、

収容所を出たときの心情は言葉で言い表せない。しかし、途中で引き返された事例も聞かされていたから、そんなことになったら大変と、汽車のなかでも「民主主義者」らしく装ってふるまったし、最後の関門「ナホトカ」の収容所では、いっぱしの運動家気取りもしてみせた。本当に帰れると確信したのは、帰国船が岸壁を離れてからであった。十月二十九日に舞鶴入港、山の緑を目にしたときは胸にこみあがるものがあつた。帰国船は「遠州丸」、忘れられない船名である。

おわりに

二十三年十一月に、やっと故郷（函館）に帰った。兄や多くの知人友人が戦死していたこともわかったし、シベリア抑留経験者もいた。我々は体調が正常に戻るのにさらに二か年近くを要したが、ともかく生還することができた。戦争や抑留で犠牲となった多くの方々のご冥福を祈りながら、運命的な三年間を振り返りつつ、体験をつづった。

【執筆者の紹介】

倉部さんは、大正十一年、北海道亀田郡銭亀沢村字石崎（現、函館市石崎町）で生まれ、地元の高等小学校を卒業してから、郵便局に勤務しておられた。昭和十六年以降になると物資もだんだん不足になり、町内会で「兵士壮行会」には特に酒類などの調達に苦心したと述懐している。昭和十八年一月に現役兵として旭川北部二部隊に入隊した。そして三月には関東軍要員として満州第八八部隊（西東安）に転属になり、同年八月には満州第二六三九部隊警備中隊に転属した。

このとき、私も他の部隊から転属してきたのがきっかけで、以来、同じ中隊の仲間としてきょうまで親しく交遊を続けている。氏は軍隊当時から真面目で人の嫌がることでも率先してことに当たっていた。その人柄は今も変わっていない。

十九年の秋から二十年三月まで、下士官候補者教育のため神奈川県の陸軍兵器学校に派遣され、東京での実習時には、米軍機の大空襲を何度も体験した話をしている。満州の原隊に戻ってから、終戦時までの一時期中隊は別々であったが、シベリアに抑留されるとき

はまた一緒になった。

日ソ戦での苦闘、シベリア抑留中の苦勞などを折に触れ語り合っているが、氏は戦争の残酷、悲劇を二度と起こしてはならないと、このことを後世に伝えておきたい、との意志も強く、いろいろと文筆の機会を生かしている。今日まで、北海道新聞への投稿で「私の終戦記念日」「抑留者を慰めた『雨のブルース』」など、また、生活協同組合の「明日に語り継ぐ」「私の戦争体験記」への寄稿などがある。また子孫に伝えるものとして「回想、戦中五年十ヶ月」をも執筆されたそうである。「シベリア抑留編」が今回の寄稿文となっている。

倉部さんは昭和二十三年十一月に復員され、漁業協同組合に勤務されて後、同組合の幹部職員を経て、さらに北洋さけます団体役員を勤め、ソ連訪問なども体験している。ありし日のシベリア抑留の因縁を語り合ったりしている。全抑協札幌支部創立（昭和五十六年四月）時の当初より支部役員として活動してこられたが、一方では永年にわたって地元の町内会長として

も地域のために活躍されている立場にもあり、何かと多忙のため、現在では全抑協の役員は辞任している。

しかし会員として種々協力をお願いしているものである。氏はさまざまな人生経験をもとに、地域大衆に根を下ろした組織活動を大切にし、そこから平和社会が築かれて行くと理念を持っている。

（北海道 森 英一）

四年兵が生き抜いたシベリア抑留

茨城県 石橋 實

私は昭和十六年四月二十八日の徴兵検査で甲種合格となり、八月上旬波崎町役場の兵事係より現役兵証書が届けられた。これに北支と書かれており、これを見て戦地へ行けるぞとほくそ笑んだ。

当時、私の家では鉄工所を経営していたのでときどき青年学校へ行くことができた。軍事訓練に行つて鉄砲を持つての殺し方の練習である。当時、日本男子な